
パワースポット

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パワースポット

【Zコード】

N2687Q

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

武は彼女とパワースポットに出かけて、不可思議な体験をする。

武は恋人の麻美と山の頂上に登りつめた。

二人の目的は山の頂上にある靈験あらたかな磐座に、手を触れてそのパワーを受けて願いを叶えてもらおうといつものだった。

いわゆる、今巷で有名なパワースポット周りの一環としてここへ訪れたのだ。

周りには人が今はいない。

二人は左右を窺いながら、早口で注連縄を巻いた大きな岩に囁いた。

「今日競馬で5万すっちゃんがさつさとやめますよ！」

「会社の嫌味なおばさんのがさつさとやめさせてください！」
「隣のアパートの住人が夜中ガンガン音ひるさいのでやめさせてください」

「母がもう少ししお小遣いくれますように！」

「……」

「……」

「……」

「一人は手前勝手な祈願を磐座の前で捲くし立てるど、せつきボテトチップス食べて脂ぎった手で岩を一人して撫で回した。
麻美はさらに口紅がべつとりついた唇を岩に貼り付けてキスをした。

「おいおい、そこまでしなくても」

「苦笑いを浮かべる武。

「いいじゃん、これでご利益あるなら、儲けもんよ」
「ははは、そうだな、なら、俺も、ん~~~~ちゅ」

一人は取り合えずやることやつて気が済むと、立ち上がって手を繋ぎ、山頂から青い空がどこまでも続く遠くの空を望んだ。

「次はどうこいくかー、 山の靈山も靈験あるつてよ」

「いいわねーこここの寺なんだか狭いから」「利益なさそうだしね、そこのこつか」

「ああ」

一人は既に次のパワースポットの後光に魅惑されていた。
そして、頭の中は煩惱で渦巻き、途中で通り過ぎる寺の本殿など目も暮れず、ただ、神木が両側に佇む細い山道を駐車場目掛けて歩いていくのであった。

盤座に宿る山神様はその一部始終を見ていた。

「なんちゅー奴等じや、ワシを何でも屋か、便利屋ぐらじとしか思つておらんな」

山神様は自分の白い作務衣を見て愕然とした。

胸の辺りにくつきりとあの茶髪のそばかす女麻美の口紅の跡がべつとりついているのだ。

袖にはなんだか薄茶色の粘着質の手垢まで付着している。

「毎度のことだけど、腹たつなー、また川へ洗濯にいかないといけないわ」

山神様は石の上に座り込んで、腕組みをしてしばらく考え込んでいたが、

「まあ、でもワシも神様だし、これまで祈願しにきた人間には幸福をもたらしてきた、分け隔ては良くない、あいつ等の願いも……」

そこまで言うと、諦念のようなものを顔の刻み、山の中腹にある清水へと歩いていった。

武はパワースポット周りから帰ると、連休明けもあって、当たり

前の如く仕事へ出かけた。

配送業である。

今はちょうど繁忙期を終えて、ある程度配送スケジュールには余裕があった。

しかし、それでもこの頃はネットの隆盛で、ピークは過ぎたとはいえ、週6日勤務で、遅い時は夜9時までトラックで日本列島を駆け巡ることもざらだった。

「はーあ」

ため息をつくが、目の光は陽気に輝いていた。

この仕事を初めて5年、もう熟練のドライバーになりつつあった。ノウハウを積んで、それなりにやりがいや仕事に対する矜持や責任感も持っている。

それに車に乗ること 자체は嫌いではなかつた。

むしろ、見知らぬ土地を車で廻るこの職業は性にあつていた。

「よし、次届けたら飯にすつか」

「でさー、パワースポット言つてきたんよ」

「へー、今はやってるもんね」

麻美は昼休み、会社の同僚と二人で喫茶店へ赴き昼食をとつていた。

皆仕事場で話にあう同僚たちだ。

朝8時半から18時の拘束時間の合間にこの時間は彼女等にとって唯一一息つける時間だ。

「部長がねー……だから……」

「酷いよね」

彼女は喫茶店の奥まった席を選んで、ひとつめのない話で静かに盛り上がる。

会社の上司の話や、同僚のイケメンの男の話題、映画の話題作や、美味しいケーキを売る店の話など多岐に渡る。

会社からそう離れていないカフェなので、大きな声で会社内の人
の話はできない。

だが、このカフェは会社より少しだけ離れていて会社内の人間が
あまりこない穴場でもあった。

三人が昼食を食べ終えて、コーヒーが卓上に並べられた頃、思
いもかけぬ人間がやってきた。

「あ、皆さんこんなところにいたの。席」一緒に締していいかしら、お
腹減つてるのよ」

「あはは、は「どうぞ」

麻美たちは苦笑いを浮かべながら、彼女を開いている席へ招き入
れた。

本当なら断りたいところだが、この会社のお局様である洋子を無
碍にはできなかつた。

なにせ、会社の社長の愛人という噂が社内では取りざたされてる
からだ。

「ふふふ、ありがと」

洋子は土足で人の家にあがるかのように、三人の安息の地へ平然
と分け入つた。

洋子は予想したとおり、マイペースで一人話し、会話のタクトを
握つたまま話さなかつた。

「だから、麻美ちゃんはさ、もつと化粧を濃くするべきよ」

「はあ、なるほど……」

「私もね、30半ばになつてからは肌に気を遣つてるのよ」

「はあ……」

麻美は心の中で29だよまだ……と呟く。

いつまでここにいるのよ。ＫＹも程ほどにして欲しいわ。

うんざり気味だったが、顔の表層は常に作り笑いを保持していた。

同じ仕事場で、先輩でもあり社長の愛人でもある洋子はまさに目

の上のたんこぶだった。

遠方のパワースポットで洋子が消えればいいと祈願した気持ちに嘘偽りはなく、寧ろ、次は貴船神社の靈木に彼女の藁人形を釘打ちしようかと思う程だった。

人を呪えば穴二つ。

しかし、その怨念が暴走する一歩手前でこの呪文を唱えることで、幾らかその憤りの炎も静めるのも常のことだった。

周りの同僚はすっかり洋子の独壇場と化したこの空間で居心地悪そうにしていた。

息抜きを目的としたカフエで、お局様に捕まつて友達同士の会話もままならない。

下手なことを言って、彼女の不興を買えば後が怖い。

麻美以外は窓の外を眺めていたり、一人は化粧室にいったまま帰つてこない。

はあーあ、いつまでいるんだろうこの人、武どうしてるかなあ

お局に生返事を返しつつ、麻美の心は遠い青空の下働いているであらう武のもとへ飛んでいた。

「ああ、混んでやがるな」

その日の夕暮れ、武はいつもとは違う道順を辿つて帰つたために、渋滞に巻き込まれていた。

普段はこの道路は使わないのだが、何故か今日に限つてこの1-8号線にハンドルを切つてしまつた。

夕方から混むのはわかつていたんだがな……

己の気まぐれに腹立ちを覚え、ハンドルを強く右手で叩いた。

辺りにある全てのものが紅く染まり、下校時間とあつて学生が三々五々帰つていく姿も見て取れる。

いいよなあ、奴等はもう帰宅か、だが俺はこのままじや帰りは10時過ぎるわ

武は大きなため息をついた。

信号が青になつても、前の車は止まつたままだ。

「どうすつかな」

武は右斜線に視線をやつた。

三車線の道路は左斜線と直進方向は混んでいたが、右斜線は空いていた。

こちらに曲がると、少し遠回りになるのは知つていたが、渋滞に巻き込まれたままよりは、幾らか気分は軽快になるし、ひょっとしたら時間も短縮されるかもしれない。

「いちかばちか、行つてみるか！」

武が勢いよく右側にハンドルを切つた、その時だった。
けたたましいクラクションの音が背後から聞こえ、猛烈な衝撃が車内と武の体のを突き抜けたのは。

武は何が起こったのか分からなかつたが、その意識は状況を把握する前に薄暗い闇の中でぶつりと途絶えてしまった。まるで、テレビの電源をリモコンで切つたかのように現実世界と切り離される。

武は気がつくと、薄暗い部屋にぼけーっと佇んでいた。

木の匂いが香ばしい室内は、まるでログハウスか、もしくは、お堂の中のようだつた。

そこに木製の長テーブルが一つあり、その周りに人の気配がある。

「ん？ 誰じやお前は？」

武はいきなり何者かに呼びかけられて足を踏み出すると、突然スポットライトを浴びたように、長テーブルがある、室内の丁度真ん中付近に橢円形の光の領域が生まれた。

建物は古ぼけてるのに、センサー式の電灯なのか？

訝しげに思いながらも、他人の家に侵入して見つかったこそ泥のようになつて愛想笑いを浮かべながら、

「すいません、夜分に。気がついたらこの場所へきていて……怪し

いものじやないんですよ

「ふん、充分怪しいわ！」

テーブルに向かつて黙々と何かを書き綴っていた、顎下に長い髪を蓄えた老人が怪訝そうに言った。

「まあまあ、いいじやないか、わしら暇なんだし」

「ばかいえ、暇なんはお前等だけじやろうが……」

テーブルの傍で座布団を枕側に寝転んでいた丸顔の老人は、自分の隣に座布団を置いた。

「ほら、こちらへきなさい」

しわくちゃの丸顔に親密な微笑みを浮かべた老人は、今に折れそ
うな細い手を振つて武を招く。

「お言葉に甘えて……」

武は何度も頭を下げながら緊張下面持ちで、丸顔の老人の横に腰
を落とした。

「あ！　お前は、この間の若者じやないか」

「え？」

この室内の空氣にも次第に馴染んできていた武を、筆ペンを置いた髪の長い老人が身を乗り出して怒鳴りつけてきた。それは武にとつて青天の霹靂だった。その声には微妙に武を怯えさせる恐怖にも似た迫力があつた。

誰だろ。俺こんなじいさん知らないぞ。あ、もしかしたら配達先でへまやつたご隠居さんかな

武は時々配達が遅れて、顧客のクレームを受けることがあつた。怠慢から遅れたわけではないが、混んでいる時はどうしても指定された時間に間に合わないことがあつた。

「すみません、あの時はどうも、こちらの不手際で……」

「ふむ、わかつてゐるならいいんだ、意外と頭低いじやないか」

「いえいえ、こちらが悪いんですから」

髭の長い老人はその言葉を聞いて、強張った顔を解して微笑みを浮かべた。

「まあ、わかつてくれればいいんじゃ」

そして、髭の老人はまた筆をとり黙々と机に向かって白い紙に墨をつけた筆で文字を認める。

武は周りを見渡して、「ここはどこだろ?」と考えていた。
室内が明るくなつて、今いる場所がどこかの農家の家か、お寺の中であろうとは思うが、正確な場所は把握できるわけがない。
よつて、立ち上がり外に出て確かめようと、外に通じるであろう観音開きの木の扉に手をかけた。

「あ、開かない」

「どうした?」

寝転んでいた丸顔の老人が細い掠れた声で武に問いかける。

「開かないんです」

「んー? もしかしてお前、死んでるのか?」

「え?」

「この扉は神であるわしらか、生者しか開けられないんじゃ、死者はでれん」

「神様……死者……」

「可哀想になあ、そんな若い年で」

武はそれを聞いて程なく、心中でここに来る前に受けたあの衝撃が蘇ろうとしていた。

確かにあの瞬間、自分の中へ金属の鋭い何かが衝き抜け

武の頭の中で得体のしれない不吉なものが膨らんでいき、今にも破裂しようとした際際、

「カーニーッ! オイ、お前仕事しろ、それとそここの男、こっちへこい!」

背後からの大喝が、武の意識を一いつひへ強制的に引き戻した。

「武とやら、この前お前が、ワシのねぐらで色々祈願していつたじやん」

「え？」

「知らぬとは言わせぬぞ、茶髪の紅い服きたそばかすのあるねーちゃんど、ワシの住むいわくらまでやつてきただじやん」

「ああ……つてどういうことですか」

「あのいわくらはワシのねぐらじや」

最初は老人の言葉にびんとこなかつた武は、ぼーっと虚空で思考を漂わせていた。

が、不意にまとまりのないものが、頭の中心で形を成していく。この老人は、今の言葉が本当なら、配達先の老人ではない。神と名乗った老人、生者しか出れない扉をもつ不思議なお堂。そして、今のいわくらの話、そこを壇とする老人。

ここは 、そしてこの人は。

武は自分がとんでもない勘違いをしていたことにやつと気がついた。部戸から入る一陣の涼風が頭に活力を与え、その事実を武に悟らせたのだ。

「わかつてるものだと思つていたがな」

「いえ、今わかりました」

「まあ、よくよく考えれば、ワシの姿が見えるわけないしな。こりや、ワシも勘違いしどつたわ」

武は面白なさそうに苦笑いをしたが、そのまま虚ろだった。

この老人が神様であることが分かったのと、ほぼ同時に、自分が死者であることに薄々感づき始めていたからだ。

「ワシも驚いた、お前がまさか死んでるとはな、だがその扉を抜けられないということはつまり、そういうことだ」

武は顔面蒼白で、俯いたまま口元を震わせていた。

重々しい現実を神様から告げられ、いよいよその実感が体の深いところへ染み渡つていく。

俺は本当に死んでしまったのか、もう、俺は生きて……麻美

と会えないのか……。

「辛いの～、あのねーちゃんともお別れじゃの、でもまあ、何の因果かしらんが、このお堂にお前はやつてきたのじゃ……そうだな）わしも何かしてやれれば良いの……じゃが」

長い髭の老人は考える素振りをしながら、程なく何か思いついたよつに、「

「ちょっと待つておれ」

「ほら、これじゃ、お前たちが好き勝手に祈願したいわば、願い事の束じゃ」

「おう、お前は人気者じゃのお

寝転んでいる丸顔の老人が、恨めしそうに言つた。

「あいつはなあ、本殿の神なんじやが、この頃この寺付近を尋ねる者は増えたのじゃが、みんなワシのところばかりに祈願ばかりきて、つまり仕事をとられて、今暇なんじやよ」

髭の老人は丸顔の不服の原因をなんとなしに武に聞かせた。

「だがな、ワシは大忙しじや、パワースポットかなんか知らんが、流行りだしてからもうてんてこまいよ、毎日書類の山にうずもれて、このお堂に缶詰にされて口がな一日祈願の書にサインをせねばならぬ」

「た、大変ですねー」

「人事のように言つた、その中には、お前達が漏らしたつまらない祈願も混じつてるんじやぞ」

「ああ、す、すみません」

武は祈願の事を思い起こしていたためくなつた。

「でもまあ、お前も死んだ事だし、せめて、お前の女の願い事でも叶えてやらないとな、お前も可哀想な奴だしな」

「ええ、いいんですか……」

武はもう自分は死んでしまつている。

それなら、神様の言うとおり、彼女の祈願だけでも叶えて貰つて、

彼女が幸せになれば……

そんな殊勝な思いを一瞬抱いたが、あいつ、どうせひくでもない自己中な祈りしかしていなかつたなつ思い出しため息をついた。

「車が欲しい」

「同僚のお局がいなくなつてほしい」

「小遣いくれ」

「…………」

長い髪の神が読み上げる彼女の祈願の内容に、武は我が事のように赤面して小さくなつていた。

なんて恥ずかしい奴だ、貪欲な奴め。

武は自分が彼女に対して軽く嫌悪を感じながらも、また別のところではそんな彼女の無邪氣で純粋な願望に触れて、彼女を微笑ましく思い口元が綻びそうになるのを必死に堪えていた。

「これは…………」

髪の長い老人は彼女の祈願が書かれた紙の一つを無言で武に手渡した。

その文面を目に入れて、武は目の奥がかーっと急激に熱を帯びるのを感じた。

「まあ、そんな夢を見たんだ」

あの後、涙で目が眩み視界がぼやけて、暗黒の空間を彷徨つた武。しかし、次に目覚めた時はベッドの中だった。武は奇跡的に一命を取り留めたのだ。

ベッドの傍らでスツールに座つてりんごを剥ぐ彼女にその不思議な話の一部始終を話していた。

「で、その最後の私の祈願には何が書かれてたの？」

麻美は屈託ない笑顔で武に優しく聞いた。

「さあな、最後は記憶があやふやで思い出せない」

言いながら、彼女がりんごを切りおえるのを見計らつてその白い

小さな手をとつた。

「でも、お前とは死ぬまで一緒にいたい」

「武……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2687q/>

パワースポット

2011年1月19日20時40分発行